
なーんてね

みえさん。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なーんてね

【ZPDF】

Z0804S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

「ロシア作戦」と呼ばれるテロがあった。その直前、少年久住洋一は同じテロリスト仲間であるリーズナにある問い合わせをする。

久住洋一という北欧混じりの日本人は結構後から入ってきたメンバーだ。

それなのに、彼は「幹部」側にいる。

東洋の遺伝子のせいで実年齢よりも幼く見える彼が「幹部」のガイルのお気に入りだからとか、リーダーや、他の幹部とも姦通しているなど、彼には不名誉な噂が流れている。軍隊よりは開放的とはいえ、それ上がりのものもいるために、男を好む男も多い。その中で彼の存在は「言わずもがな」だろう。

リズのような女よりも、彼の方に手を付けたい男も多い。だが、彼に手を出そうとした連中は尽く痛い目を見ている。なおも止まないのは彼の外見で勘違いをする人間が多いからだとリズは知っていた。

「男つてバカね」

リズはモニターに表示されている内部資料の「死亡」欄に男の名前を打ち込みながらぼつりと呟いた。

表向きは通信士として働くリズだが、実際はコンピュータ関連の一切を取り仕切っている。それは違法と言われる侵入や破壊はもちろん、こういった雑用の件までも。もちろん彼女一人で行う訳ではないのだが、今部屋の中には彼女一人しかいなかつた。

「あれ？ リーズナさん、一人？」

部屋に入ってきた久住洋一は少し首を傾げて問いかけた。

「そーよ、誰かに何か用だつたの、クズミ？」

「誰かについてわけでは無いけれど、この間殺しちゃった人のことで少し調べたい事があつてね」

「手伝う？」

「つうん。急ぐ訳じやないからどーだつていいや
言つて彼は彼女の隣に座つた。

洋一の使う言葉は相手によって変化する。口調もそうだが、言語すらもあつさりとかえる。リズの情報によれば彼はここに来るまではずっと日本で暮らしていたという事なのだが、本当にその情報が合っているのか疑問だった。

少なくともリズの知っている日本人でこれほど語学力に優れたもの、ナイフの扱いに慣れたものもない。

「ひょつとして徹夜？」

リズの顔を見ながら洋一は問う。

「分かる？」

「うん、少し疲れた顔してる。美人なのに、勿体ない」

冗談やお世辞でもなく本心からそう言つているのが分かつてリズは少し笑つた。

彼女は普段からジャージにニット帽、メガネという男が女と意識しないような格好で作業をしている。物好きや女なら何でもいい連中が声を掛けることはあったが、基本的にここに籠もりつきりの彼女を女として見る者は少ない。

洋一は少数派の方だ。

ただ、別にリズを口説こうとしてそう言つている訳ではないので、好感を持っていた。

不思議な子だな、とリズは思つ。

「一人きりって初めてだね」

「そうね」

リズは頷く。

そう言えば今まで二人で話している時でも誰かどうか近くにいた。本当に一人きりになつたのは今日が初めてだ。何故か楽しそうにする洋一にリズは首を傾げた。

「どうしたの？」

「いい機会だからリーズナさんに良いこと教えてあげようと思つて」

「いいこと？」

「日本にこういう言葉があるんだ。敵は本能寺にあり、」

「……？ それってどういう意味があるの？」

彼はにこにこと笑つた。

リズは怪訝そうに眉をひそめた。

彼が何を言いたいのかが分からぬ。彼が実は組織の裏切り者を調査していることはリズはそれとなく掴んでいた。確証はないし、誰かに聞いたこともないが、それが事実とすれば今自分は疑われていると言つことだらうか。

リズはパソコンを打つ手を止めずに洋一を見た。

洋一は感心したように声を上げる。

「画面を見なくとも平氣なんだ？」

「指先が覚えているから。もちろん、画面を見ていた方が間違いないし、効率も良いけど」

本当は話ながらやると効率が悪くなる。

止める気になれなかつたのは向かい合えば要らぬことまで知られてしまいそうだったからだ。

日本人にしては珍しい銀色の瞳。

その目は真実を暴き出すといつ魔法の石のようだつた。

「僕はどうちだつて良いんだよ」

「……何が？」

「リーダーの目的がどうちだつて」

「……？」

リズは首を傾げる。

言つてゐる意味がますます分からぬ。その反応を見て洋一は肩を竦めてみせた。

「あれ？ ひょつとしてそこまで掴んでいないんだ？」

何を、とは問わなかつた。

ただし納得したように曖昧に笑つてみせる。その笑みは彼の言葉を理解したようにもしていなによく見えた。彼が何か情報を残してくれてもよし、残さなくても後でリーダーの身辺を洗う必要がある。

敵は本能寺、と洋一はもう一度呟いた。

「組織つてさ、大きくなるとその存在を維持する方向に力が注がれるんだってね。今度の作戦のこと、リーズナさんもちろん知ってるでしょ？」

「作戦、と聞いて最初に思い浮かんだのはロシアのことだ。
近く幹部がロシアの方に行く。」

向こう側の商人と取引があるということなのだが、別の目的もあるのだと踏んでいる。それは肅正。リーダーの目的がどちらか。彼が言つたのはそれの事だろうか。

「害虫は駆除するなら一度にした方が早いよね。だけどせ、その対象が、真実害虫だけとは限らないんだよね。ガスマスクでもしなきや猛毒は撒けないし」

「怖いこと言うわね」

「僕は本当にどうちだつて良いんだよ」

彼はくすくすと笑う。

疑惑が生まれた。

ひょっとしてリーダーは今度のロシアの作戦で死ぬ気ではないのかと。あの信念を持つた人が、見届けることもしないで死を選ぶのだろうか。それとも、彼女は幹部の誰かも巻き添えにしてしまうつもりだろうか。

後者だとすれば、洋一もその対象に入っているのだろうか。

リズは覚えず手を止めて彼を見た。

どこまで何を掴んでいるのか分からぬ洋一は、判断しかねる優しい笑みを浮かべてリズの方を見ていた。

でもね、と彼は不意に漏らす。

「リーダーが決めちゃったならそれで良いけど、僕はどうじょうかなって思つて」

「相談しに来たの？」

「ううん、アンケートをしに来たんだよ。リーズナさんは信長と秀吉どっちが好き？」

「それ、日本の武将の名前よね、オダノブナガと、えっと、ヒテヨシ」と
シ

織田信長をフルネームで覚えていたのは、その子孫というのをテレビで見たことがあったからだ。世界各国の膨大な歴史や情報を全て記憶している訳ではない。だから印象に残った事以外は性格に覚えていないのだ。

ヒテヨシは、何と言つただろうか。

「豊臣秀吉だよ」

「どっちが好きと言われてもよく分からないわ。あまり興味がない

し

「ふうん、じゃあリーズナさんは信長派だと思つて良いのかなあ……」

「それが、何か意味があるの？」

「だから敵は本能寺にあるんだよ。リーズナさんの一票で僕は信長を取ることに決めたよ。……あなたが、未来を決めたんだぞくり、とした」

最後の下りからまるで感情が感じられなかつた。それまでは「今日の夕飯どっちにしようか」という程度の軽々しいものだったのに、最後の一瞬だけは何か審判を受けたかのようだつた。

リズが重大な事を決めてしまつたような緊張感。選択肢が分からないままで選ばされたから余計に嫌な感じがした。元々希薄だつた顔の表情が更に強ばつしていくを感じる。

自分は今、何を選んだ？

「……なーんてね」

洋一は相好を崩す。

「え？」

「ちょっとアンケートごしだけだよ」

彼は子供っぽい笑みを浮かべて立ち上がる。

「また後で来るよ。……ロシアから戻つたらさ、データしようね」

「知つてる？ それ、死亡フラグっていうのよ

「しつてるよ。日本では有名だからねでも指摘されたら大丈夫なんだって」

「へえ、じゃあ、デートも考えておく」

「うん、期待しているよ」

そう言つて洋一はリズの肩を叩き外に出て行く。

その姿を見送つてリズは洋一の言った「本能寺」の意味を調べる。日本語は分からぬから検索にはそれなりの時間がかかった。だが、日本のことわざや故事成語が翻訳された辞書を発見するとその言葉は結構簡単に見つかった。

画面に羅列される文章を読み、その言葉が出来た経緯を知る。

「え？」

秀吉と信長の関係を理解したリズは絶句する。

その関係を、組織の人間に当てはめて行くと、リーダーが何を考えているのか、そして洋一が何を選択したのが見えた。

洋一は、信長を選んだ、と言つた。

それは恐らくトップに君臨するのはどちらが良いのかと問う行為。わざと分かりにくくしたのは、コインを投げる行為と同じ。

リズは背もたれに寄りかかって息を吐いた。

「……取り敢えず私、正しい選択したのかしら」

簡単に選んでしまつたことが、少なくとも自分が望んでいない結末を生むのではないかと知つてリズは安堵した。

自分がコインにされたと知つても、それを生んだのは自分の失態に一因があるのだから怒るに怒れなかつた。

「女も、馬鹿ね」

自嘲気味に彼女は笑う。

どうやら警戒していたつもりでも、リズ自信、彼を外見で判断していらっしゃい。得体が知れないけれど、毒氣の少ない日本人。そう決め込んでいた節がありそうだ。

これでは彼に殺された男たちのことを笑うことが出来ない。

自分の方こそ大馬鹿者だつた。

「まあ、今度から気を付けねばいいことよね。
彼の口調をまねて、リズはもう一度笑った。

……なーんてね
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804s/>

なーんてね

2011年3月31日14時55分発行